大使発

駐アルバニア大使　伊藤　眞

一層の緊密化へ〝桜満開〟を期待

バルカン半島の西側に位置するアルバニア共和国は未だ日本ではあまり知られていない国かも知れません。人口300万人弱の国ですが国民はその民族の歴史、文化、伝統、言語に大変な誇りを持っています。コソボをはじめ近隣諸国にはアルバニア民族が多数居住しており、出稼ぎ移民も加えたこうしたディアスポラの存在はバルカン地域の安定に極めて重要な役割を果たしているといえます。

主たる産業は農業と観光であり、美しいアドリア海、イオニア海に面する海岸地域が数多くの欧州諸国の観光客を惹きつけています。民主化以降安定して発展しているアルバニアは2009年にNATO加盟を果たし、現在はEU加盟を目指し国内の政治・社会・経済改革を急ピッチで進めているところです。

アルバニアは元々キリスト教の国でしたがオスマントルコの支配下でイスラム化が進み、大戦後は独裁者ホッジャ党第一書記の下で厳しい弾圧政策がとられ、当時無宗教の国となりました。現在国民の６～７割がイスラム教徒といわれていますが、その大半は穏健なベクタシと呼ばれるイスラム教徒で異宗教間の婚姻も珍しくなく、またラマダンを含む戒律、儀式は極めて緩やかであり世俗的なものとなっています。

また長い共産主義時代を経て国民の間には共産主義に対するトラウマ、嫌悪感が根強く残っており市内には数多くの当時の弾圧の記念館が存在します。そうしたティラナ市に初代アルバニア在住日本大使として私が着任し１年半以上がたちましたが、まず驚かされたことは人々が明るく極めて親日的であることです。旧体制時代の最大の敵国であった米国は現在最も頼りにされる友好国となり、日本・日本人に対しても同様にアジアの先進民主主義国として敬意を払ってくれているのです。また1990年代初めから経済協力を通じてアルバニアの国造りを支援してきていることも国民の間に親日感が生まれていることの背景にあります。

天皇誕生日レセプションにメタ大統領（左）とともに。中央が伊藤大使＝2017年12月

そうした状況のなかで極めてスムーズに大使館の立ち上げと二国間関係の推進に取りかかることが出来たことは幸せでした。先般は先方外務大臣からの強い要望に応え、「日本さくらの会」から寄贈いただいた桜の苗木20本を外務省前庭に植樹することとなり、外務大臣としての２度の訪日を通じて日本通となったブシャティ外務大臣と私とで植樹を行いました。近い将来、勤勉で優秀な労働市場の供給先としてアルバニアが日本企業に注目され、両国関係の一層の緊密化に繋がることを期待するとともに、両国の友好親善を象徴する桜が満開となることを楽しみに日夜仕事に取り組んでいる毎日です。